



ジュウビタキ

果樹園などでは、秋から冬にかけて、特にミカンや柿の実を食べに、メジロ、ヒヨドリ、ムクドリなどの様々な鳥がやってきます。

ジュウビタキは、灰色の頭に黒い背中、お腹はオレンジ色をした冬鳥です。縄張り性が強く、アンテナや電線・木の梢などに止まり、ヒッヒッヒッという高い声やカッカカッカという声を出します。

目 次

巻頭言

「同僚とともに創る学校」

教育研究所運営協議会委員長 山本 俊夫 …………… 2

1 小さなころみ

「どの子どもも参加できる、わかる授業をめざして」

学習の困難さに対応した支援に関する研究員 井上 智子 …………… 3

「自分を、そして小田原を好きになり、社会に貢献しようとする子を育てるために」

小田原版市民教育の教材開発に関する研究員 山下 英久 …………… 4

2 ある教室から

「子どもたちの言葉でつながる話し合い」

教育指導課指導主事 村田 久美子 …………… 5

3 研究所だより①～③

教育指導課研修相談員 小宮 隆雄 …………… 6

教育指導課指導主事 石井 美佐子

大須賀 剛

同僚とともに創る学校

教育研究所運営協議会委員長

山本 俊夫



私達教職員の仕事は、子どもの視点に立ってみると授業場面、児童生徒指導場面等、個人で子ども達と向き合う仕事であると捉えることが多いでしょう。日常生活をふりかえったときにも職員室で同僚と話をしたり会議で話し合いをしたりする時間よりも多くの時間を、教師は、子ども達といっしょに過ごしています。そこは、一般的には同僚には見えない教室という空間で過ごしています。この教室という場は、個々の教師の専門性が生かされる「授業」が生まれるところであると同時に、閉鎖的になり、心理的にも硬直化する危険性も含む場であります。

多様化、複雑化する教育課題の解決に向けて、多忙化を招き授業の準備ができずにマンネリズムに陥ってしまったり、児童生徒に指導力が発揮されなかったりといったように事態が好転しない場合も残念ながら生じてしまいます。さらに学校全体としてこなすべき仕事が多いため、組織が活性化されないといった状況も見られることがあります。

教職員は専門職として、同僚とともに学び合い、学校のあり方を創り出していくこと、関わり合い、つながることから授業観や学習観、児童観、指導観等を形成、変容させていくこととなります。つまり「教えること」だけでなく同僚との関わり、つながりから「学ぶこと」を通して教職員の専門家としての姿が見えてくるといえるのではないのでしょうか。

では、同僚として重要なことは何か。それ

は、同じ職場に所属して働いているだけでなく教育ビジョンを共有することであると考えます。そしてその学校が求める方向に向かって共に学び合い専門性を高め合っていくということでもあると考えられます。教職員同士が、教育のあり方を協同で探究することを通して、ビジョンが共有され明確になっていきます。そのような教職員の関係は「同僚性」とよべれます。

この同僚性の発展形態をみると、一方的に話しかけることや、手伝ったり援助したりすることから、情報の共有、協働の活動といった、個から相互依存へと発展することによって、関係が深まると考えられます。それは互いに信頼し合う関係、援助し依存し合う関係への移行といえます。

教職員の仕事は、さまざまな感情を伴う労働という側面も持ち合わせます。そこで同僚の信頼関係は大変重要といえるのではないのでしょうか。今、学校を創っていく力の一つに同僚性をと考える所以です。



どの子も参加できる、わかる授業をめざして

学習の困難さに対応した支援に関する研究員

川口 宏美 (芦子小) 井上 智子 (町田小)

上條 大志 (東富水小) 柴田 敏勝 (国府津小)

中村 栄江 (国府津中) 山崎友紀子 (酒匂中)



1 はじめに

文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国調査(2012)」によると、学習障がい、注意欠陥/多動性障がい、高機能自閉症を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒は、通常の学級に約6.5%(2002調査では6.3%)の割合で在籍しているとされており、その中には、学習に困難さを感じている子も少なくないと思われます。そこで、「学習の困難さ」ということについての理解を深め、全ての児童生徒の学習の可能性を広げ、力を高めていくための学習支援のあり方を探る研究を進めることにしました。

2 研究の内容及び活動状況

(1) 学習困難さの理解

児童生徒はどのような場面で、どのような学習に難しさを感じているのか、各校の状況や日頃感じていることなどを話し合いました。発達障がいによる特性が学習の難しさに影響していると思われることもあります。学習のつまづきやすいところは、発達障がいのある・なしにかかわらず、同じであることが多いと思われました。

(2) 学びやすさにあった指導法の工夫

そこで、子どもの認知処理の傾向を把握すること、そして、その傾向を生かした指導について検討するために、川崎市の小学校で作成された児童向けアンケート調査表を参考に、「学習スタイルアセスメント」を実施することにしました。このアセスメントは、子どもの認知処理の過程をおおまかに把握するためのもので、解釈としては、大きく「継次処理過程」と「同時処理過程」の二つに分かれます。「継次処理」が優位の子の認知の特性は、聴覚的・言語的な手がかりをもとに、時系列で処理をしていくほ

うが理解しやすいこと、一方「同時処理」が優位の子の認知特性は、視覚的・運動的な手がかりをもとに、全体を大きくとらえてから学習をすすめていくほうが理解しやすいことを先行研究や文献から学びました。

認知特性にあわせた支援のあり方を考えるとともに、どの子にも理解しやすく、どの子も参加できる授業作り(授業のユニバーサルデザイン化)にも取り組んでいくこととしました。

(3) 授業研究(小学校2年生国語)

授業のユニバーサルデザインのキーワードである「視覚化」「焦点化」「共有化」と、子どもの認知の特性にあった手立てについて、実際の授業を通して考えていくことにしました。

視聴覚教材や読書のアニメーションの手法を取り入れた授業では、2年生の子どもたちが最後まで集中して学習に取り組むこと姿が見られました。前の単元で学習した掲示物も、子どもたちの理解を促すものとなっていました。また、教室環境、特に黒板まわりや、黒板の中をすっきりさせることも、子どもたちが学習に集中するために必要であることなどを確認しました。

3 おわりに

研究1年目の今年度は、手探りながらも、児童生徒が学習にどのような困難さを感じているのかとらえ、学びやすい授業の工夫について検討してきました。今後は、より子どもの特性や状況を正しく理解・把握する為のアセスメントの作成や、小・中学校それぞれの学習の系統性を考慮しながら、支援の視点を取り入れた授業づくりの工夫についてさらに検討を重ね、実際に学校で使いやすい形にまとめていきたいと考えています。(文責 井上)

「自分を、そして小田原を好きになり、 社会に貢献しようとする子を育てるために」

小田原版市民教育の教材開発に関する研究員

柴田 典子（三の丸小） 宮田 泰範（下府中小）

山下 英久（富士見小）

和田 裕子（鴨宮中） 田代 俊介（酒匂中）



1 はじめに

めまぐるしく変化し続ける現代社会にあって、子どもたちが将来、市民として十分な役割を果たすために、近年、市民教育（市民性教育）への関心が高まっている。とりわけ、近年の若者の勤労観の変化や社会的無関心、規範意識の低下は重大な問題であり、将来を担う世代に、地域やより広い社会と関わることの重要性、社会規範や法の遵守の大切さを伝えるとともに、社会の事象を批判的にとらえる思考力や、適切な行動を選び取っていく判断力を育てていく必要がある。

そこで、本研究では、小田原市の児童・生徒に必要な市民教育とは何か、教科や領域の内容と関連させながらどのように展開していくかなどを研究し、教材化を図っている。

2 研究の内容

研究の立ち上げにあたり、まず、総合的な学習の時間が小田原市でどのように進んでいるのか現状を探った。小学校では、生活科や社会科・理科などで地域教材が取り上げられており、そこで学習したことに関連付けながら、総合的な学習の時間で市民性を育むことに大きな可能性があることを確認した。どの教科のどの単元で市民性にかかわる学習をしているのかを洗い出し、それらとの関連を図りながら年間を見通した学習計画の作成を考えている。中学校では、職場体験と関連付けながら単元を考えれば

1・2年生の学習として取り入れることができそうである。学校ごとにその地域の自治会に協力を仰ぎながら、地域と関わる体験的な学習に取り組むことが可能なのではないかと考えている。

単元計画を作るにあたり、「市民性とは何か」「どういう市民を育てていきたいか」「どんな力をつけていきたいか」を考えた。小田原市が行ってきた様々な学習や取り組み、他県の事例を参考にしながら、「自分のことを好きになり、小田原（自分の住む地域）を好きになり、自ら主体的に社会に貢献しようとする子ども」を育成することが、本研究の目的を達成することになるのではないかという思いをもち、単元開発を行うことにした。現在、各研究員が単元計画を作り、各校で実践しているところである。

3 おわりに

小田原市の学校教育の重点である「地域一体教育」「幼保・小・中一体教育」の具現化に向けて、具体的に「どの学年でどのように実践していくのか」「単元や授業をどうつくっていくか」などについて考えながら、各校の先生方が無理なく取り組めるような学習計画を考えているので、それを参考に授業に取り組んでいただけたら幸いです。（文責 山下）



「子どもたちの言葉でつながる話し合い」

教育指導課指導主事 村田 久美子



「ぼくの『お悩み』はね、②の形なんだけど・・・」2年生の教室で、算数の「かたちをしらべよう」という学習が行われていました。今まで一般的に「しかく」と捉えてきた形の中で「四角形」と定義される形を、その構成要素に着目して分類する場面です。

「それ、解決できるよ！」授業はその後、子どもたちによるさまざまな説明が進んでいきます。「ここはこう考えるとこうなるでしょ？」「うん。」「それで、こうなるんだけど、ここまではいい？」「うん。」「わかりやすい！」

発言する子は、友だちに一生懸命自分の考えを伝えようとしています。聞いている子どもたちもそれにしっかり応えようと、発言する子に注目しています。説明の中では何度も相手に確認を求める語りかけがあり、聞いている子どもたちもそれに対して反応するという自然な話し合いが行われていました。

教師は、その話し合いの中で、発言する子と聞いている子たちの様子確かめながら笑顔で見守っています。教師の動きというと、必要な場面では発言者の説明を助けるように、黒板にある資料を指し示したり、キーワードとなる言葉を板書したりする程度です。

「ここがこうだから、こうでしょ。」「ううん、ちょっとわからない。」「もう一度言ってくれる？」「・・・」説明が止まりました。ここで教師の出番です。多くの場合は、教師の言葉で子どもの発言を補足するという流れではないでしょうか？しかし、ここで教師から出たのは、次のような問いかけの言葉でした。「もう1回説明する？それとも誰かにお願いする？」

発言していた子は友だちにお願いすることを選び、次の子がさらに説明を続けていきました。そこにあるのは、あくまでも子どもが考え、子どもの言葉でつなげていくという、子ども主体の話し合いの姿でした。

このような話し合いができる背景には大きく二つの姿が必要であると考えます。

一つは、「子どもたちが伝えたい考えをも

っている」という個の姿です。

今回の授業では、前時に十分時間をかけ、自分なりに仲間わけをしてその理由も書いたワークシートが子どもたち一人一人の手元にあります。話し合いの前にそれをもう一度読み返し、自分の考えを確かめたり、悩んだことなどを振り返ったりしてから話し合いに臨みました。子どもたちは伝えたい自分の考えをもっているからこそ、主体的に自分の考えを発言したり、友だちの考えと比較したりすることができるのです。

もう一つは、「安心して自分を出せる学級である」という集団の姿です。

「わからない。」「悩んでいる。」など自分の素直な気持ちを安心して言葉にできる、そしてそれを当たり前のこととして受け止め合える学級の風土があるということが、とても大切な要素であると考えます。授業の中では、「ここまではわかるんだけど。」「うん、ちょっとわからないな。」などのやりとりが自然に行われており、「こんなこと言ったら笑われるかな。」などの不安な様子は全く見られませんでした。日頃から子どもたち一人一人が大切にされている学級だからこそ、「わからない。」「悩んだ。」と素直に言えて、それをみんなで解決して「わかった！」という言葉に変えていけるのだということを強く感じました。

この2つの姿を育てるためには教師のコーディネートが不可欠です。日頃から一人一人の思いや言葉を大切にしている教師の姿勢や話し合い経験の積み重ね、そして事前の学習計画の工夫や子どもの話し合いを見取りながらの適切な声かけなど、教師の役割はとても大きいものと言えます。

子どもたちの言葉でつながる話し合い。その中には生き生きとした子どもたちの姿があふれています。そしてそこには、個としての子どもと集団としての子どもたちが、教師とともに高まっていく姿があるということであらためて実感した学習の一場面でした。



「パワーアップ研修」は、「教育実践の工夫改善に積極的に取り組んでいる意欲ある若手教員に対し、学校訪問による個別的な研修を実施し、一層の指導力向上と教職に対する情熱を高める」目的で行われるもので、今年度は、小学校の教諭14名と中学校の教諭3名の方が受講しています。

年間研修日は、1回の全体会を含め、各自、5回です。全体会は、小・中別々に行い、それぞれ代表者の授業を参観した後、参観した授業や各自が日々研究している内容等について話し合いました。また、全体会を除いた4回の研修日には、各自が設けたテーマや参観した授業を中心に話し合いをしています。研修者の皆さんは、日々、多忙な学校現場の第一線で活躍されている先生方ですので、年間5回の研修は厳しいようですが、皆さん前向きに取り組んでいます。

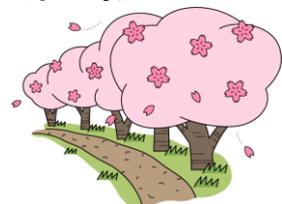
現在、学校現場は、いじめ・不登校・学力の向上等々、いくつもの課題を抱えています。これらを解決する上でも、当然のことですが教職員の指導力向上が欠かせません。このような中、研修相談員が研修者の学校に赴き、授業を参観した後、具体的な話し合いを継続的に行う「パワーアップ研修」は、大変有意義な研修だと思います。従って、我々研修相談員は、より有意義な研修にするために、研修者の疑問や課題に的確なアドバイスができるよう心掛け、研修テーマに関わる様々な指導理論なども、具体的な例を挙げながら分かりやすく伝えるよう努力しなければならないと思っています。

東京都の教育界で長年活躍されてきた西村文男さんは、その著書『ザ・チャレンジ』で、

「子どもの本質は昔も今も少しも変わっていないのである。子どもは、常に活動的で、何事にも興味・関心を持ち、意欲的に挑戦し、善さの実現に向かって精一杯の努力をするのである。時代の変化、社会の変化とともに、子どもたちの好みや言動も変わってきているのは事実であるが、子どものもっているエネルギーや本質は、いつの時代でも同じであり、つねにより善く、人間的に生きようと努力しているのである。

教育は、こうした子どもの持つエネルギーや本質を大事に育てふくらます営みである。」と書いています。これを教育の本質を考えさせる言葉として、研修員の皆さんにも紹介するようにしています。

傍目には順風満帆のように思われたが、「30代はしんどかった」と話す歌舞伎役者の市川染五郎さんが、38歳の誕生日に「歌舞伎に専念し、ひたすら稽古することで『根拠のある自信』を身につけたい。」と言っています。教職に携わる我々も、教職に専念し、ひたすら努力することで『根拠のある自信』を身につけることができるのだと思います。私も、研修者の先生方が抱える課題解決のための具体的なアドバイスができるように、今まで身につけてきた知識や技能を最大限に発揮するとともに、研修者と共に学び続けるという姿勢を持ち続けたいと思います。そして、この「パワーアップ研修」を通して、研修員の皆様それぞれが、1つでも多く『根拠のある自信』を身につけてほしいと願っています。



児童生徒への学習指導の改善・充実に向けて

～クローズアップ研修会・学習指導法研修会（算数・数学）～



平成19年度から始まった全国学力・学習状況調査。平成25年度からは再び全児童生徒対象の調査に戻ります。この調査は、児童生徒の学力や学習の状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的として実施されているものですが、実際のところ教育現場での活用の状況は、自治体や学校により差があるようです。

教育研究所では、小田原市の児童生徒の調査結果を分析・検証し、改善のポイントをまとめ、各校に配付するとともに、教育研究所のサイトでも公開していますので、ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

また、その改善のポイントを具体的な学習指導にいかすことができるよう、「学習指導法研修会」を開催しています。昨年からは国語と算数・数学を隔年開催とし、今年は算数・数学についての研修会となりました。

第1回の研修会では、横浜国立大学教授の石田淳一先生から「数学的解釈・表現力を育てる学習活動について」お話いただき、グループで指導案を検討する演習に取り組みました。第2回では、早川小学校の馬場教諭と永松教諭による5年生の図形の授業を参観し（平行四辺形の面積を求める学習）、研究協議を行いました。活発に発言する子どもたちの姿と、その姿を引き出すべく綿密に立てられた単元計画に心を動かされた研修会参加者も多かったように思います。

「授業は
テストではありません。」

正解を求めるだけの授業ではなく、なぜ間違えたのかを考えたり、答えを求めるまでの道筋を大切にしたりする授業にしていきたいと思いました。

研修会の感想
から・・・



- 普段、自分がしている授業では育っていかないと思いました。明日から変えていかれるところは、変えていきます。(第1回：小学校)
- 今まで、「できた」「できない」の授業になってしまったことに気付かされました。また、子どもたちが安心して学習するために、足場作り（全体での共有）がなかったことにも気付かされました。(第1回：小学校)
- 授業が見られて具体的に感じることができよかった。その授業のふりかえりを含めた協議も、小・中でちがう考え方があっておもしろかった。もう少し時間をとってよかったと思う。(第2回：中学校)

第1回の研修会では、実際に出されたB問題が紹介されました。じっくりと、そして自分の持っている知識を総動員して考えていく力と、問題に粘り強く取り組む意欲が求められていることがわかります。そうした力を子どもたちに育てていくには、「形だけの問題解決的学習になっているのではないか・・・」「皆で解決に向けて話し合うために、子どもたちは同じ土俵に立てているのだろうか・・・」もう一度自分自身の授業をふり返ることが必要なのかもしれません。

4月からの授業をさらに充実させていくために、B問題にぜひ挑戦してみてください。明日からの授業づくり・問題づくりのヒントになるものと思います。

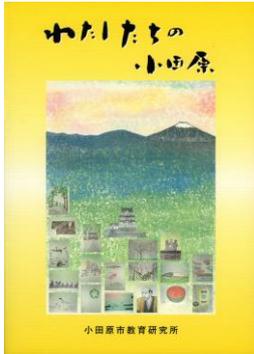
石田先生の一言から・・・

ふるさと小田原をもっとよく知るために・・・

～研究所でも「おだわら・はあと」をサポート！～



子どもたちが小田原に興味・関心をもち、理解を深め、自信をもって小田原を語り、小田原を愛する気持ちをはぐくむ学習（小田原の良さをいかした学習「おだわら・はあと」）をサポートしていくために、研究所では小中学生向けの社会科や理科の副読本を制作しています。



小 学校3・4年生向けの社会科副読本「わたしたちの小田原」は、現在大幅に内容を見直しての改訂作業中です。（平成26年度発行）

新しい「わたしたちの小田原」では、小田原について「知る」ことに加えて、今の自分のくらしや、これからの小田原について、子どもたちが「考える」ことができるよう配慮をしています。

また、小田原の水産業や治水の歴史に関しては、5年生の学習で使っていただいても、中学生に読んでもらってもよい内容となっています。

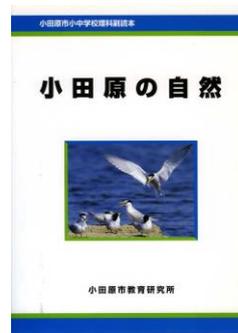


中 学生向け社会科副読本「郷土読本小田原」は、今年度内容を一部変え、また、書体もより読みやすいものに変えて、この3月に各中学校にお届けすることができました。

「御用米曲輪遺跡」の発掘など、ちょっとした歴史ブームにある小田原ですが、歴史に関する内容についても、最新の情報に更新しています。小田原出身の方にも、そうでない方にもぜひ一度（またもう一度）読んでいただきたいと思えます。

小田原の自然活用講座 「自然観察会」のご案内

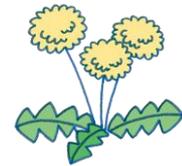
研究所では年間8回の自然観察会を実施しています。今年度は200名を超える参加者がありました。教職員の皆様の参加も大歓迎です。観察のポイントがわかるだけでなく、新鮮な発見もあると思います。



市 民の方からの「購入はできませんか。」という問合せが多い「小田原の自然」。小田原の自然の豊かさを知ることができる一冊です。小学校4年生での配付ですが、中学生でも使ってもらえるように、小学校名と中学校名

が記入できる欄を設けています。小中学校で有効活用して頂きたいと思えます。

いよいよ春本番。この本を手の外に出て、自然を見て、感じてください。



小田原教育 第118号
発行日 平成25年3月15日（金）
発行所 小田原市教育研究所
発行者 所長 佐久間 秀樹
〒250-8555 小田原市荻窪 300
電話 33-1730
http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html